

海外補習授業校のための社会科年間指導計画

— レインボープラン2015の試み —

鳴門教育大学 小西正雄
ホノルル補習授業校 清水貴久子

I はじめに

小稿は、ホノルル補習授業校、通称レインボー学園の小学部5年生を対象とする社会科年間指導計画案について、その作成の意図や意義について小括しようとするものである。

補習授業校とは、平日は現地校に通う日本人子弟を主な対象として、主として週末に開かれる文字通りの補習授業のための教育施設である。日本で使用される教科書を教材とし日本の教育課程を準用することが求められているものの、平日フルタイムで日本とほぼ同じ学習環境を保障している日本人学校とは異なり、そのカリキュラム展開にはさまざまな制約がある。

世界各地の補習授業校は、その規模、校種、開設教科、教員構成などにおいてじつに多様であるが、授業日が限定されていることからくる授業時数の圧倒的な不足は共通した課題となっている。したがって日本の教育課程を準用するとは言え、全教科を網羅することはもちろん不可能で、国語を主としてそれに算数を加える程度にとどまっている場合も少なくはない。

*

小稿でとりあげるレインボー学園は、幼稚部、小学部、中学部あわせて29クラス、560人の園児、児童、生徒を有する比較的規模の大きな補習授業校である。創設は昭和49年で、校長、副校長および2名の事務職員を加えて総勢34名の教職員（専科を含む）で運営されている（平成26年度学校要覧による）。

現在の校舎は、ホノルルのランドマークであるダイヤモンドヘッド北麓の住宅街に位置するカイクミ中学校のものを土曜日のみ借用しており、施設の保守管理もさることながら、教材・教具の校

舎内留置が図書室内の図書を除いて一切認められていないことからくる授業展開の困難さは否めない。教員は、文部科学省派遣の校長以外はすべて現地在住者で、教育には熱心ではあるものの、必ずしも教育や学習指導に関する専門教育を受けていないため、教材づくり、授業づくりにおいても手探り状態という場合も珍しくはない。原則として日本から派遣された正規の教員で構成される日本人学校とはこの点で大きく異なる。

また学習者側も、日本人学校の場合とは異なり、必ずしも「日本にもどる」ことを想定はしていない。とくにレインボー学園の場合は、現地ハワイないしメインランド（合衆国本土）での生活を視野に入れている者が多く、日本語や日本事情を学習することへのモチベーションも多様であり、そもそも学習の基礎である日本語運用能力にもかなりのばらつきがある。

このような困難な環境のもとではあるが、レインボー学園は、小学部1年生から4年生までは国語4時間、算数2時間、小学部5年生と中学部では国語3時間、算数2時間、社会1時間を基本とする教育課程を維持し、修学旅行や運動会、「日本文化の日」などの各種学校行事を欠かさないなど、積極的な学校経営を展開している。

*

海外補習授業校のもつこのような特異すぎるとも言える教育環境のもとでは、どのような社会科授業が必要であり、かつ可能なのであろうか。

以下では、「目標」「単元構成」「授業づくりの視点」の3点から「レインボープラン2015」¹⁾策定の意義について詳述する。

II 目標の再設定

小学校社会科の目標は「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」（学習指導要領）ことにある。しかし、当然ながらこの目標は設定し直されなければならない。なぜならば、「社会生活についての理解」や「公民的資質の基礎」は、平日、子供たちが通う現地校でそれなりに学ばれているはずだからである。

もちろん、学習指導要領に言う「公民的資質の基礎」の含意が、現地校で行われている social studies の内実と即応している可能性は低い。わが国の社会科教育が、占領期においてアメリカから持ち込まれた social studies を手本にして設計されたものであるのは事実にしても、それは出発時点ですでに日本風にアレンジされていたし、科学的社会認識と公民的資質育成のこの両者の関係性をめぐる議論のなかでその後の社会科はさまざまに揺れ動いてきた。一方、アメリカ社会科もまたそれなりに変質は遂げたであろうし、同国の実状からして、州によって学校によって、より多彩な展開がみられるはずである²⁾。したがって双方の社会科が現在もなお同様な立ち位置にあるわけではない。

しかしながら、その乖離はどうであれ、現地校で social studies が学ばれている以上、社会生活（社会のしくみ）に関する基本的な理解や主権者としての資質の育成などを補習授業校社会科であえて目標化するのには、屋上屋を架する恐れが大であると判断せざるをえないのは当然である。

*

では、残余の部分、すなわち「我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」の部分はどうであろうか。ここで言う「我が国」とは当然日本のことであるが、レインボー学園の多くの子供たちにとっては、日本は必ずしも「我が国」ではない。子供たちにとっての「我が国」は第一義的にはアメリカないしハワイ州である。生活様式もほぼアメリカ化していて、授業中は日本語を話していても、休み時間となると友人同士の会話は少なから

ず英語となる。多くの子供が和名をもっているとは言え、日本の昨今の流行その他に通じているわけではないし、休暇を利用して日本の学校へ「短期留学」すれば、自己のアイデンティティを否応なく再認識させられることもあろう。

しかしながら、子供たちが完全に日本を対象化しているわけではないこともまた確かである。両親ともに日本生まれの場合、どちらかが日本生まれの場合、日本の親戚と密な交流がある場合、いずれは日本にもどることを考えている場合、ホノルル周辺で日本関係の職業（ホテル経営など）を営んでいる場合など、家庭環境によって子供と日本との心理距離は一樣ではないが、現地校の級友が休んでいる土曜日に、わざわざレインボー学園に通ってくるからには、それなりの日本への思い入れがあることは想像に難くない。もちろん、資格取得上何のメリットもないにもかかわらず子供を補習授業校にあえて通わせる親の強い意志があることも言うまでもない。その意志の後景にもまた、日本に対する微妙な距離感がある。

つまり、レインボー学園の子供たちにとって日本は、「単なる外国」ではない。「意識化された」故郷ないし「意識化された第2の故郷」、あるいは「意識化されるべき『我が国』」である。

「我が国（日本）の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」という目標は、以上の実態をふまえた時、指導要領の含意とはべつな色合いを帯びてくると想像できる。それは、日本で社会の一員として生活するための一定の知識ないし能力を身に付けさせるための目標ではなく、あえて日本を意識のうちに取り込ませ、なんらかの形で絆を保持し続けさせるという特別な教育的意図のもとに掲げられた目標だと位置づけ直される必要があるのである。

III 単元配当数と内容構成の再検討

使用されている教科書（東京書籍『新しい社会』）の教師用指導書（平成23年度版）によれば、第5学年社会科の年間総授業時数は100時間という設定である。一方、レインボー学園で社会科授業のために用意できるのは、週に1時間、実質的には年間32時間である³⁾。したがって計算上、1回

の授業で3回分の内容をこなさねばならないことになる。このような環境下で教科書記載の教授内容をできるだけ過不足なく扱うことを優先し、たとえば自動車の生産工程の解説などの細かな事象にまで踏み込んでしまうと、内容の希薄化は避けられないし、レインボー学園に必要な「我が国（日本）の国土と歴史に対する理解と愛情を育てる」という目標に迫ることも困難になる。

レインボープラン2015では、単元の配当時数を単純に減じるのではなく、先述した目標論の議論をふまえて内容を大胆に精選し、以下のようにアクティブウエイトをかけることとした。

- 国土単元 8時間=25.8% (18.0%)
- 食料単元 7時間=22.6% (26.0%)
- 工業単元 7時間=22.6% (24.0%)
- 情報単元 3時間= 9.7% (16.0%)
- 環境単元 6時間=19.3% (16.0%)
- 総復習 1時間 — —

() 内は指導書による配分

*

つぎに考慮しなければならないのは、各時のテーマ設定の問題である。「今日は何について考えるのか、何が理解できればよいのか」を自覚させることは授業を成功させるのに必須の条件である。そのため教科書には基本的には1見開きごとに1つの学習問題が明確に設定されている。にもかかわらず、たとえば3見開きを1授業時間でこなせば、当然ながらその授業時間の主テーマを設定することはほとんどの場合非常に困難になり、子供の授業への参加度も減じようし、学習効果も薄れざるをえない。

それにそもそも、たとえば18時間分で設定されている国土単元の教授内容をアクティブウエイトの結果8時間でこなそうとする場合、単純には割り切れない以上、従来の教科書の「見開き主義」そのものを前提として授業内容を構想することは不可能なのである。

以上をふまえてレインボープラン2015では、教科書を尊重しながらも、独自のテーマと内容構成を追求することにした。以下に各単元の基本的なねらいと各授業のテーマを示す。(※については後掲の参考資料参照)

○国土単元：ハワイから見た日本

この単元は日本の自然環境を理解させるもので、産業学習とならんで5年生の学習の核となるものである。レインボーの子供たちにとっては社会科との初めての出会いとなるので、できるかぎりハワイの話題を登場させることで、学習へのスムーズな導入を図った。低い土地と高い土地、暖かい地方と寒い地方は、教科書ではそれぞれ選択事例となっているが、必要性を考えてあえて両方取り扱うことにした。4年生で学習することになっている都道府県学習は必須の要素なので最後の8時間目に特設した。

- 1 日本はホノルルよりも南にある？！
- 2 日本とハワイー似ているところ、似てないところ
- 3 低い土地のくらし
- 4 高い土地のくらし ※
- 5 なぜハワイは「常夏の島」なのか
- 6 日本のハワイへ行ってみよう ※
- 7 寒い土地のくらし
- 8 いくつ知っているかな？

○食料単元：日本の食料生産

第1単元とならんで日本の現在を理解させるのに必要な話題が豊富にある単元であるので、7時間つまり全体の4分の1近い時数を当てている。米作りの細かな工夫や魚の運搬のスケジュールなどは必要性があまり感じられないので省略した。そのかわり、ハワイ在住者にも比較的身近な食の安全については時間を割いている。なお日米間の懸案であるTPPについては工業単元で扱う。

- 1 大地のめぐみ、北から南から
- 2 米づくり列島ニッポン
- 3 ハワイの米作り、庄内平野の米作り ※
- 4 米作りに未来はあるのか
- 5 日本人はお魚大好き
- 6 アクはどこで獲れる？ ※
- 7 これからの日本の食料生産

○工業単元：日本の工業生産

この単元では自動車生産の仕組みの紹介に多くの授業時数があてられる(通常9単位時間)。しかし、レインボー学園の実態からあえて扱う必要はないと判断して思い切って削除し、自動車工業

の特色については他の食料品工業などと並列させて軽く扱うことにした。その代わり、「日本のアウトラインについて知ってほしい」との趣旨から、第4学年で扱う伝統工業の話題をこの工業単元に取り込むことにした。

- 1 工業－グループワーク ※
- 2 日本の工業の特色
- 3 / 4 あなたはどこに工場を作りますか
- 5 日本の風土と伝統産業
- 6 これからの工業生産 ※
- 7 日本の貿易の特色

○情報単元：情報化した社会とわたしたちの生活
この単元の学習内容は、先進国のどこにでもみられる現象やその課題である。したがって現地校でも何らかのかたちで学習しているはずであり、わざわざレインボー学園で日本の教科書を使ってこれを学習させる意味は希薄である。しかし、教科書を一応網羅してほしいとする関係者の意向も尊重しなければならないので、配当時数を削減しつつも、可能なかぎり教科書の記述を使い、なおかつホノルル在住の子供たちの生活実感にも合わせた学習活動を想定してみた。

- 1 わたしたちのくらしと情報
- 2 情報でつながる 情報をつなげる
- 3 情報とのつきあい方

○環境単元：わたしたちの生活と環境

この単元は森林、環境保全、災害対策の3つの項目からなっており、本プランでは各2時間をあてている。水俣病などのいわゆる公害については、教科書では選択事例扱いとなっているが、日本の忘れがたい教訓として知っておく必要があるとの観点から、環境を考える視点の第1としてこれを位置づけて扱うことにした。「自助、共助、公助」については教科書にはないが、日本の小学校防災教育でしばしば扱われる概念なので取り上げることにした。

- 1 世界遺産から見えてくる日本のくらし ※
- 2 森林のたいせつなはたらき
- 3 鴨川と生きる
- 4 よりよい環境を伝えるために
- 5 災害列島ニッポン ※
- 6 みんなのいのちを守るために

IV 授業づくりへの課題(1)

－教科書の位置づけ－

レインボー学園における授業づくりには、日本の学校におけるそれとは比すべくもない数多くの困難がある。先に述べたように、地元中学校の借用である校舎には原則として教材・教具の留置が認められない。土曜日の午後4時30分には完全に原状復帰して退出しなければならない。したがって、たとえば地球儀や掛け地図を日常的に使用することはできない。また、本来の使用者が前面のホワイトボードに掲出した資料を一時的にせよ撤去することは許されていないので、場合によっては非常に窮屈な空間での板書を余儀なくされる。VTRやパワーポイントを使用することは可能だが、そのためには毎回自宅からそれらの機材を運びこむ必要がある。

以上の物理的とも言える種々の制約は措くとして、社会科授業研究に限定した場合、もっとも大きな障害となって立ちはだかっているのが、教材研究や授業研究の機会が教員に保障されていないことである。

補習授業校の教員は授業日（レインボー学園の場合は土曜日）以外には一般の職業に就いている場合が大半である。日本の国内の学校や日本人学校のように、フルタイムで学務に専念できるわけではない。したがって、教員同士の授業研究の機会はゼロに近いし、それがあっても、そもそも教員免許不保持者も少なくない状況では議論の深まりは期待できない。また、小学校社会科ではとくに重要と思われる教材開発の機会も限られてくる。図書資料の収集、教員自身による地域調査、関係番組の収録などに割く時間も十分に確保できるわけではない。

*

このように制約された環境下であっても教材研究、授業研究を可能にする唯一の方策は、すべての教員、子供が所持している教科書を有効に利用することである。レインボープラン2015では、「教員は新たな教材開発は基本的には行わない」という前提に立ち、教科書本文はもとより、掲載された写真、グラフなどの資料類を徹底的に活用する

ことをめざした。たとえば、

- 「工業のさかんな地域の広がりには、地形や人口も関係しているのかな」というようなフェイスの発言に「いいにこだわって応答してみる」
- 自宅学習にまわされることも多い教科書の作業課題（「やってみよう」）を積極的に活用する。たとえば情報単元の「情報モラルチェックシート」など
- 「苗木を育てる」から「間伐」までの作業工程写真と「林業で働く人の変化」「木材輸入量の変化」の2つの棒グラフのあわせて3つの資料を使って簡単な説明文を作ってみる

など、教科書編集者の意図を十分に、あるいはそれ以上に活かした学習活動を提案している。

また、「災害列島ニッポン」では、地震災害の恐ろしさを実感させるために同じ下巻の情報単元の〈大地震を伝える放送局〉の本文や写真を活用するように誘導したり、「世界遺産から見えてくる日本のくらし」では、木造家屋が多いことを示すために、情報単元に掲載されている「東日本大震災のボランティア活動」と題する写真（＝大量の木材ガレキが写っている）を活用するなど、「使える資料は何でも使う」という方針で教科書内教材の「発掘」に努めた。

このほか国土単元の「いくつ知っているかな」では、子供たちに地図帳を徹底して使わせるために、日本の47都道府県のうち「島」のつく都道府県、動物の名前が入っている都道府県などを探させるクイズ形式の学習場面や、工業単元の「あなたならどこに工場を作りますか」では、教科書を使って各種工業の特色をつかませたあと、自動車工業など4つの性格の異なる工業を47都道府県のうち候補として示された5つの都道府県のうちのどこに立地させるかを提案させるゲーム的要素を加味した学習場面も取り入れて変化をもたせている。

*

もとより、教科書の誌面にある資料は「徹底的に活用」されるように厳選されているのだが、そのためのノウハウは指導書に必ずしも明記されているわけではなく、その教材性は十分に活かされているとは言い難い。我が国で一般にみられる研

究授業では教員の開発した独自の教材を用いて授業が作られる場合が少なくなく、「教科書を徹底的に活用した授業」を見ることはまずない。

したがって以上の事例は、特段レインボー学園のための示唆と言えるものではない。むしろ我が国の授業研究がもつ過度な教材開発志向への逆照射とも言える示唆である。新たな教材を開発する余裕などないレインボー学園の教員の視点にたつことで、むしろ教科書研究の有効性と必要性が再確認されたと言うべきであろう。

V 授業づくりへの課題(2)

―身近な教材考―

小学校社会科では、子供たちにとって興味をいだきやすい教材を用意することで学習意欲を喚起するかたちの授業づくりが少なくない。最近では価値判断・意思決定の能力育成を前面に掲げた授業も目立つようになってはいるが、教材優先型の伝統的な授業づくり手法はまだまだ健在と言える。なかでも身近な教材や地域教材は重宝され、その開発は社会科教育実践研究の一つのフィールドとなっている。

ここで問題となるのが、「身近」の意味である。レインボー学園の子供たちにとって「身近な地域」とは、ホノルル周辺ないしオアフ島、あるいはせいぜいハワイ諸島の範囲にとどまる。学習対象である日本は一般に言うところの「身近な地域」ではない。「意識化されるべき『我が国』」は身近な場所にはなく、身近な場所にあるのは「意識化しなくてもよい『我が国』」である。したがって、レインボー学園の子供たちは、小学校5年生の段階で、同心円拡大ないし環境拡大の原理に逆らって遠い世界へと意識転換（ワープ）することを余儀なくされることになる。

もちろん、日本の社会科授業にあっても、地域学習から国土学習へと進むにつれて社会科嫌いが増えるという傾向は以前から指摘されている（「5年生の壁」とも称される）。北海道に住む子供にとって沖縄の事例は決して「身近」ではない。何らかのワープがそこには求められる。しかしそのワープは「我が国」の範囲内に限定されている。

「我が国」を学ぶために「我が国」の中でワープ

する。しかしレインボー学園の子供たちに求められているのは、「我が国」を学ぶために外国へとワープすることなのである。

この隘路を突破するには、教科書に記載されている内容の単なる加除だけではなく、記載されている日本の自然事象・社会事象を、あえて身近な事象すなわちホノルル～ハワイ諸島の自然事象、社会事象と結びつけて説明することで、ワープによる心理的負担を減じるという手立てが必要になってくる。

もちろん、その必要性は従前から認識されていたが、教科書の記述内容の網羅に腐心したため、身近なハワイの事例をあえて付加することは躊躇せざるをえず、結果的に、教科書に記載された日本の自然事象・社会事象は第三者的に語られ、理解されるにとどまっていた。しかし、先述したようにレインボープラン2015では、年間指導計画の枠組みそのものを大胆に見直し、見開き単位の教科書の構成にとらわれない独自の授業テーマ設定を試みた結果、「ワープ材としての身近な教材」ないし話題をふんだんに盛り込むことは、むしろそれゆえに十分に可能となったのである。

*

まず試みたのは、教科書にある自然事象・社会事象を身近なハワイのそれと比較対照することで「日本の中にハワイを見つけさせる」あるいは「ハワイの中に日本を見つけさせる」という手法である。たとえば、

- 日本の火山の写真⇔ダイヤモンドヘッドやタララの丘
- 沖縄の風景や産業⇔ハワイの風景や産業
- 地産地消の記事⇔ハワイ諸島各地でみられるファーマーズマーケットのようす
- 火山災害⇔キラウエアの溶岩流
- 魚食文化⇔ワイキキのSUSHI店
- 日本の貿易依存⇔ハワイの貿易依存
- 日本の世界遺産⇔ハワイの世界遺産
- 鴨川環境保全⇔ワイキキビーチの砂の保全などである。ただし、「高原」「寒冷地」「工業地帯」「産業公害」などは適切な比較対象がなく、教科書の記述に多くを頼らざるをえない。

つぎにとり上げるのは、日本のある自然事象・

社会事象の説明にあえてハワイの事象を絡ませるという手法である。

- 方位概念の習得⇔オアフ島の地名（ノースショア）
- 野辺山高原の高距性⇔オアフ島最高峰カアラ山の標高
- 日本の四季⇔常夏の島ハワイというイメージ
- 地域ブランド⇔アロハシャツ、コナコーヒー
- 手工業⇔ウクレレ生産

などである。ハワイは日系移民が多く、日本とのつながりも深いので、たとえばワイキキを中心に多くの店舗をもつミニスーパー＝ABCマートの品ぞろえを見ても、そこに日本との多くの接点を見つけることができる。少し歴史書をひも解けばハワイと日本の意外なつながりも発見することもできる。その意味ではワープ材には事欠かない。しかし先述したように、レインボー学園の教員にはそれらの発掘のために費やす十分な時間は与えられていないし、平日は現地校に通う子供たちに多くの調べ学習を強いることもできない。ために、身近な教材の有用性を強く示唆することにはつとめて禁欲的たらざるをえなかった。後掲した指導計画は、したがって、ハワイという地域がもつ豊かな教材性のごく一部をしか具現してはいない。ここにレインボープラン2015のある種の焦燥がある。

VI おわりに

「清水プラン」からレインボープラン2015に至るまでの一連の試行錯誤は、あえてジャンル分けするならば、いわゆる開発研究に位置づけられる。しかしながら、すでにあきらかなように、教授書の開発研究などと異なり、このプランの汎用性はゼロである。このプランはレインボー学園のためだけに作成され、それ以外の教育機関での活用の余地はまったくない。また、今回の試みは、当然のことながら、社会科教育研究上のいかなる「理論」とも無縁な位置にある。この2点からすれば、ここに教科教育研究としての意義を見出すことは一般論としてはむずかしい。

一方において、厳しい教育環境のもと世界各地の補習授業校で社会科教育実践が展開されている以上、その改善のための支援の必要が現に存在す

ることもまたあきらかである。先述したように、その支援のかたちは個々の事例への個別の対処にならざるをえないし、またそのためには、個々の補習授業校のおかれた環境や内部の諸事情に精通し、同時に社会科教育研究、教科書研究に一定の知見を有する者の存在を必要とする。それは、このような態様の開発研究そのものの実施困難性を物語る。

*

現時点で小稿の意義をあえて挙げるとするならば、補習授業校における社会科教育実践の困難性と支援の必要性を問題提起的に示したこと、そして、特殊な環境のもとでの社会科年間指導計画ならびに授業づくりに必要な視点と、とりあえず可能な手法の一端を試論的に提示したことにあると言えるであろう⁴⁾。プラン自体の有効性等々は、今後の検討に委ねられる。

注

- 1) レインボープラン2015は 2009年に策定された小学校第5学年用の社会科年間指導計画「清水プラン」をもとに作成されている。第6学年や中学校各分野のためのプランについては、具体化するには至っていない。
- 2) 学校要覧によれば、レインボー学園に通う子供たちが平日に通う現地校は公立小学校49校、公立中学校10校、公立高等学校4校、私立学校59校の多岐に及んでいる。したがって、現地校の教育課程とレインボー学園のそれとを擦り合わせることは実際問題不可能に近い。
- 3) 年間授業日数は42日とされているが、種々の学校行事やテストのための時間を差し引くと、週1回の社会科の実質的な授業回数は限られてくる。レインボープラン2015では、「清水プラン」を踏襲して授業回数を32回とした。
- 4) 教員の指導力レベルが一律ではないことを考慮し、プランでは定型的な指導案形式をとらず、比較的ラフなスタイルでの授業イメージの提案にとどめている。プランはその通りの運用をまったく期待されておらず、教員の力量や子供の実態に応じて可能な範囲で活用されることのみを期待されている。その意味でプランは「授業づくりのヒント」の域にとどまっている。

An annual lesson plan of Social Studies for The Hawaii Japanese School — Rainbow Plan 2015 —

Masao KONISHI : Naruto University of Education
Kikuko SHIMIZU : The Hawaii Japanese School

Rainbow Gakuen is a school in Honolulu, Hawaii in the US, which offers supplementary Japanese lessons on only Saturdays to Japanese-speaking students who live in the area.

Social Studies lessons are required from 5th grade to 9th grade, and Japanese text books which are in accordance to the course of study in Japan are used. However, the school is faced with unique issues regarding teaching environment such as only being able to teach about 1/3 of the curriculum of what is taught in Japan because of the shortage in class time. Because of these issues, the teaching has been done in a forced manner.

This paper discusses the reality of the Social Studies lessons offered at these supplementary schools, as well as what the annual course plan should be in attempt basis and from many different viewpoints.

参考資料：レインボープラン2015抜粋

- 資料① 国土単元（4／8） 資料② 国土単元（6／9） 資料③ 食料単元（3／7）
 資料④ 食料単元（6／7） 資料⑤ 工業単元（1／7） 資料⑥ 工業単元（6／7）
 資料⑦ 環境単元（1／6） 資料⑧ 環境単元（3／6）

資料注 下記のプランでは、実際の教科書の誌面をあわせて掲出できない以上、これをもって議論の材料とすることはできない。また記載されているページノンプルはプラン策定時に入手可能であった見本本によるので、供給本のノンプルとの間にズレが生じている可能性もゼロではない。

資料 ①	高い土地のくらし 教科書pp. 28～31, 34
	<p>活動</p> <p>Q：ダイヤモンドヘッドの高さは？（→232m）、オアフ島最高峰は？ Q：カアラ山の近くに行ったことあるか？ 山頂付近に住めるか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 標高が高くても平らな土地だと生活できることを確認する（＝高原） ● pp. 28～29で事例地の位置や気候を確認する ● p. 29の3と5で駅や畑、牧場がカアラ山山頂（1220m）よりも高いところにあることを確認する <p>Q：高いところで生活するとどういいうメリットがあるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ● p. 30～31のハケ岳の写真を見て、山頂に雪が残っている、つまり標高が高くなるほど気温が下がることを確認する ● p. 28の2のグラフから上記を確認する ● pp. 30～31の本文を読む <p>Q：p. 34の2と同じ施設がマウナケアにもある。なぜだろう？</p>
	<p>ことば 高原 牧場 野菜づくり</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ハワイには高原というものがないのでしっかりイメージさせたい ● p. 28の2の読み取りについては2つのグラフの左右のズレにも注意したい。つまり野辺山の5月は東京の3月というように。おおそ2～3か月のズレがある ● 平地と高地の気温差は、マウナケアの雪景色からも連想できる ● 一見不利な自然条件でも活かし方があるということを確認できるかどうかが重要
資料 ②	日本のハワイへ行ってみよう 教科書pp. 44～51, 38, 40
	<p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● p. 38の写真を見て、南北に細長い日本では気候も多様であることを再確認する ● p. 44ならびにp. 8の地図で沖縄の位置（だいたい緯度）を確認する ● p. 49の写真から沖縄の風景とハワイの風景がよく似ていることを確認する ● p. 42の雨温グラフから沖縄（那覇）の特徴は冬でも日本の他の地域ほどは寒くないことを確認する <p>Q：冬でも（他地域ほどには）寒くないことを何かに利用できるだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ● pp. 46～50を読んで、沖縄とハワイの似ているところ（果樹栽培、リゾート施設、米軍基地、伝統のおどり＝エイサーとフラ）を見つけてみる <p>Q：似ているけれど違うところは？（→沖縄はハワイより気温差が大きい＝p. 42のグラフ、台風が来る＝p. 40の3）</p>
	<p>ことば 沖縄県 米軍基地</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 沖縄の冬はハワイからみれば少し寒いレベルだが、日本の他地域からみれば暖かいことになる。この視点の違いとイメージの違いをきちんと理解させたい ● 米軍基地の話題はパールハーバーから連想しやすいから取り上げたもので、本時のメインテーマはあくまでも気候である ● 沖縄からの移民がハワイの開発に大きく寄与したことにもふれたい。レインボーにも沖縄出身の先生がいるので、可能ならGTとして参加してもらおうとよい

資料	③	<p>ハワイの米作り, 庄内平野の米作り 教科書pp. 80~87</p> <p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> • pp. 80~81の本文を読んで農家の苦勞を知る Q: 「米=八十八」のたとえ話を知っているか? • http://ameblo.jp/hikaruhawaii/entry-11268532824.htmlを見て米作りの苦勞を比べる • 個人の工夫や努力だけではたくさんの米を生産できないことを確認する • pp. 82~85の本文を読んで、人々の協力体制としてどんなものがあるか見つけて発表する(ヘリ, ポンプ場, 勉強会, JA, 農業試験場, 品種改良, 人工衛星, カントリーエレベータ) • 米袋のラベルをみて、そこにある情報を読み取る <p>ことば JA 品種改良 カントリーエレベータ</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> • この時間では、個人の趣味的な栽培と「農業としての稲作」との違いをきちんと認識させたい • ホノルルのスーパーマーケットには日本各地の米袋が並んでいるはずなので、その表示ラベルを確認して産地や銘柄などの情報を読み取ることを宿題にしたい • 上記が困難であれば教師が写真撮影してきたものを提示してもいいが店内の撮影には経営者の許可が必要となる
	④	<p>アクはどこで獲れる? 教科書pp. 98~102</p> <p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> • p. 98本文を参考に、焼津港では、ハワイでもおなじみのアクやアヒが水揚げされていることを確認する • p. 99の地図でハワイの位置をあらためて確認し、ハワイ周辺でカツオやマグロを獲ることは日本から見ると遠洋漁業になることを確認する • 遠洋漁業のむずかしさを考えてみる (→①腐らせないためにどうするか ②ほかの国の近くで獲って怒られないのか) • p. 101の地図で200カイリ問題を知る(ハワイの位置に留意) • 第3のかたちとして養殖があることを知る • p. 102の本文でホタテガイの養殖について知る Q: ハワイでも養殖をしているのを知っているか? <p>ことば 遠洋漁業 養殖 200カイリ (排他的経済水域)</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> • 200カイリ(海里)は約370km • 「排他的経済水域」という用語は難しいが意味をきちんと説明したい • ハワイでもっとも有名な養殖はハワイ島のアワビ。KCCでものぼりを立てて売っている • 養殖のほかに栽培漁業という形態がありしばしば混同される。後者については本時ではふれない(p. 101とp. 103には記述あり)が、子供から関連する発言があれば取り上げて誤解を解いておきたい
	⑤	<p>工業—グループینگ作戦 教科書pp. 4~5</p> <p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> • さまざまな工業製品の实物や写真を見て、教科書を参考にそれを作る工業の分類名をあててみる。例: ウクレレ, ホノルルクッキー, the bus 停留所のルートナンバー表示の黄色い板, アロハシャツ, コナコーヒー, 日焼け止めクリーム, 携帯電話, テレビ, ガソリン, ABCストアの袋, モーターボートなど • ほかに身の回りの工業製品をあげてその分類をしてみる Q: アロハシャツと単なるTシャツの違いは? (→地域ブランド: p. 40参照) Q: ほかに地域ブランドは? (→コナコーヒー) Q: モーターボートと携帯電話はどちらも機械だがどちらが? (軽工業と重工業) Q: ウクレレは大量生産できるか? (手工業, 技術が大事, テレビ製造とは異なる) Q: ほかに手作りしているものは? (→上等のサーフボードなど) • ハワイにはたくさんの工場が集まっている工業地帯や工業都市はないことを確認する <p>ことば 機械工業 金属工業 化学工業 食料品工業, 繊維工業 重工業 軽工業</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> • あくまでも身近な工業製品の多様さに気付かせるのがねらい。必ずしも「日本」にこだわらないが、身近にある日本製品が提示できればベター

あなたはどこに工場を作りますか 教科書pp. 10～19, 26～37	
資料	<p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> それぞれの工業の工場をどの県に作るとよいか1つ選びその理由を発表する 自動車工業の候補地：奈良県, 北海道, 静岡県, 千葉県, 長崎県 製鉄業の候補地：福岡県, 大阪府, 滋賀県, 岩手県, 神奈川県 石油工業の候補地：島根県, 広島県, 長野県, 青森県, 鹿児島県 食料品工業の候補地：高知県, 宮崎県, 兵庫県, 埼玉県, 山形県 <p>ことば</p> <p>⑥</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 子供の発表に対してうまく反撃したり, それを膨らませて補足したりするのがコツ 可能ならばグループで話し合って候補地選定するのも効果的 正解を探すというよりは, さまざまな理由づけを通じて工業の特色や県の特徴を理解させるのがねらいである この作業はイギリスの社会科教科書『Going Places』をヒントに作成した
世界遺産から見えてくる日本の暮らし 教科書pp. 100～105, 113, 69, 95	
資料	<p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> pp. 100～101の写真や記事を見て世界遺産とその分類(自然, 歴史, 複合, 無形)について確認する 写真の4つの自然遺産指定地域のそれぞれについて位置と特徴を確認する Q: 富士山は世界遺産のうちのどれ? なぜ自然遺産ではないのか? Q: ハワイにある2つの世界遺産を知っているか? (→ハワイ火山公園とパパハナウモクアケア海洋公園=複合遺産) 日本の4つの自然遺産のうち3つが森林に関係していることを確認する pp. 102～103のグラフや本文を使って, 上記の理由を簡潔に説明する 日本の世界「文化」遺産で知っているものをあげる(姫路城, 法隆寺ほか) 城, 寺, 屋敷などの多くが木造建築であることを確認する Q: 木造の教会はあるのか? (→多くは石だが森林資源の多い北欧には木造あり) Q: p. 95の3の写真とカイクキ中学校の教室とのちがいはどこ? (→床の素材) 日本人の生活は木材と関係が深いことに気付く p. 69の2を見て, 津波のあとの「がれき」にも木材が多かったことを確認する pp. 104～105の本文やグラフなどをみて「天然林」「人工林」ということばを使って短い文章を作成してみる その結果とp. 113の「ここがちがうよ～」の文章を比べてみる <p>ことば</p> <p>世界遺産 森林率 天然林 人工林 原生林</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本の世界遺産(自然, 歴史)については紹介サイトがいくつかあるので画像をプリントアウトし拡大コピーすれば教材になる(あるいはパワーポイントに取り込む) パパハナウモクアケアについては下記参照 http://www.papahanaumokuakea.gov/wheritage/ あくまでも日本人と木のむすびつきについて理解させるのが主目的なので細かな用語にはあまりこだわる必要はない
災害列島ニッポン 教科書pp. 128～131, 60～62	
資料	<p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> p. 129とp. 130の写真の内容(何がどうなっているか)を確認し, 左上の分類資料と照合させる(5を除く) Q: 写真のなかでハワイでは起こらない自然災害はどれ? Q: この写真以外で, ハワイで起こりそうな自然災害は何? 阪神淡路大震災について知っていることがあれば発表する 東日本大震災(小学校2年生のときに発生)について知っていることを発表する pp. 60～62の本文と写真を参照して, 地震当日の混乱ぶりを理解する キラウエア火山の溶岩流の一件について知っていることを話し合う <p>ことば</p> <p>自然災害 津波 東日本大震災 仮設住宅</p> <p>⑧</p> <p>留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> p. 129の8の写真では破壊されたのは高架道路だけのような印象を持ちかねないので補足が必要である。可能なら被災写真を入手したい 東日本大震災の記録写真については, 教科書では, 被災した子供の心理面を考慮してあまりドギツイ内容のものは掲載していない。適当な写真を補足したい 東日本大震災やその関連事故で避難した30万人とは, ホノルルの人口のおよそ4分の3に相当する人数である 南米地震による津波でカラカウア通りが浸水したことを思い出させたい